

大見博記氏 クラウン樹脂化工株式会社 代表取締役



大見博記氏




今治タオルの捺染（プリント）加工業を支える染料・染物材料の卸・加工を営むクラウン樹脂化工（株）創業者・大見博記氏が今回の「タオルびと」である。タオルは細かな分業でつくられているが、その裾野は広い。捺染加工に必要な染料・染物材料は数多くあり、そのなかでもクラウン樹脂化工では、現在主流となっている顔料プリントと染料プリントに付随する材料を製造し、また捺染機の調達、修理などもおこなう。染織の技術者である大見氏は、専門知識を生かして今治の地に初めて染料・染物材料の卸・加工業をスタートさせ、今治の捺染加工業の発展に貢献してきた。現在もなお、年を感じさせないバイタリティで今治のタオルづくりを支える。

おおみ・ひろき ☆ 1935年9月、山口県門司市生まれ。幼い頃は父親の仕事の関係で全国各地を転々としたのち、蘇州（中国）に移住。1944年に帰国後、9歳で山鹿国民学校（現・山鹿市立山鹿小学校）に転入。1947年4月坂下村立坂下中学校（現・南関町立南関中学校）に入学し、両親の故郷である熊本県山鹿市と玉名郡で少年期を過ごす。1953年3月熊本県立南関高等学校卒業後、同年4月に信州大学繊維学部に入學し繊維に関する専門知識を学ぶ。同大学卒業後、1957年4月に染料・染物商社の日本ケミカル工業（株）に技術者として入社。1964年3月に独立し、今治でクラウン樹脂化工（株）を設立。

1. 幼少年時代

9歳まで父親の仕事で全国を転々、そして蘇州（中国）へ

大見博記氏は、1935年9月25日に父・豊記氏と母・千鶴氏の間に山口県門司市に生まれた。上には5歳離れた長姉・英美子氏がいる。実は次姉がいたが早逝している。両親は熊本県出身で、父は玉名郡、母は鹿本郡（現・山鹿市）の出である。大見氏が生まれた1935年当時、父親は鉄道省  門司鉄道管理局に勤めていたため、大見氏は門司市で生まれた。その後も父親の仕事の関係で東京をはじめ全国を転々とし、最後は中国の江蘇省蘇州市に住んだ。

5つ上の姉はすでに小学校での生活がスタートしていたため母親の実家に預けられたが、大見氏は両親とともに3年ほど蘇州市で過ごした。大見一家は6軒あった日本人居留地に住み、大見氏はそこから歩いて日本人学校に通っていた。ある日、おなじ日本人居留地に住む友人と小遣いを集めて、人力車を呼んで学校まで行ったことがある。その道中の出来事である。

車夫の中国人は、日本人学校がある方向とはまったく違う道を走り出し、家からも学校からもどんどん遠ざかっていった。友人と顔を見合わせて「誘拐される」とおもい、勇気を振り絞って中国語で車夫に尋ねると、「もらったお金の分を走っているから遠回りしているんだよ」と言う。それを聞いて安堵したが、知らない場所へ連れて行かれそうになり、ヒヤヒヤして生きた心地がしなかった。今となってはいい思い出であるが、少年たちにとっては異国の地での奇妙な体験となった。



1944年、第二次大戦の最中に大見一家は帰国し、最初は母親の実家で生活した。国家公務員だった父親の豊記氏は、戦争の行く末を案じて鉄道管理局を早期に退職し、一家で中国から引き上げることを選んだのである。帰国後、豊記氏は、国家公務員時代のキャリアとネットワークを活用して、熊本県内にバス停留所をつくる仕事

に就いた。1949年に日本国有鉄道が発足し、かつての鉄道省運輸局自動車課（省営バス）が日本国有鉄道自動車局（国鉄バス）として再開し、インフラ設備の一環として全国にバス停留所がつくられるようになる。その一端を豊記氏は担い、生計を立てた。

帰国時、大見氏は9歳だった。戦争中だったこともあり、大見氏は山鹿国民学校（現・山鹿市立山鹿小学校）に入学した。そして終戦を迎え、鹿本郡の母親の実家から玉名郡の父親の実家に移住し、1947年4月に坂下村立坂下中学校（現・南関町立南関中学校）に転入した。こうして、帰国後は両親の故郷である熊本県で多感な少年期を過ごした。

2. 大学時代

「衣」に関わる仕事に就けば、生涯食っていける

中学卒業後、1950年4月に熊本県立南関高等学校に入り、勉学に勤しんだ。将来は「衣食住」の「衣」に関連した仕事に就けば、生涯食うのに困らないだろうと考え、繊維学部のある大学を探した。当時、繊維学部を設置していた国公立大学は、東京農工大学 、京都工芸繊維大学 、信州大学の3つであり、選択肢の幅は狭かった。大見氏は、このなかから優美な北アルプスのパノラマが見える、長野県上田市にキャンパスを擁していた信州大学を選んだ。そして、1953年4月に同大学繊維学部に入學した。

信州大学は、1949年の「国立学校設置法」施行によって、松本医科大学、松本高等学校、長野師範学校、長野青年師範学校、松本医学専門学校、長野工業専門学校、上田繊維専門学校を包括し、かつ長野県立農林専門学校を併合して設立された（信州大学ホームページ）。設立時より繊維学部が設けられ、現在も学部として存続している唯一の大学である。残念ながら、東京農工大学と京都工芸繊維

大学の繊維学部は時代の趨勢により、すでに他学部と統合されて今は存在しない。

大見氏は大学時代の4年間を学生寮で過ごした。大学では青春を謳歌した。まずは演劇部に入って同僚や先輩と交流を深め、そして山登りに夢中になった。

喜劇を十八番としていた演劇部でのエピソードは、ある演目で大見氏は観客から「猿そっくり」と言われたことがあった。「猿」の役ではなかったが、猿のように滑稽に演じた。これぞ喜劇の真髄である。

そして、時間ができると山に登った。よく登った山は、飛騨山脈（北アルプス）の槍ヶ岳や穂高



信州大学繊維学部講堂

（出典：信州大学ホームページより引用）

岳である。いずれも3,000mを超える日本有数の名山である。山好きが高じて、単位取得が危なかったときもあった。3年生の定期試験



長野県・岐阜県に跨る槍ヶ岳 3,180m

（出典：長野県大町市公式観光サイト

「信濃大町なび」より引用）

期間中に、大見氏はテストそっちのけで友人と山に登っていた。登る山は3,000m級の山ばかりで、そう簡単には行って帰ってこられない。毎回、少なくとも2泊3日の入山である。無事下山して大学に行くと、テストを受けなかった担当の先生からすぐさま呼び出された。大見氏は滔々と事情を説明すると、その先生は躊躇なく善後策を提示してくれた。実はその先生も登

山愛好家だった。「今から口頭試験を始めるから答えなさい」という具合である。すんなり口頭試験に合格した大見氏は、3年生で卒業単位をすべて取得し、4年次での校外実習を残すのみとなった。上田キャンパスから見える雄大な北アルプスの山々は、大見氏にとって青春そのものだった。

大学4年生の校外実習で愛媛県へ

大見氏は、のちほど今治市で起業することになるが、どの段階で愛媛県と最初のつながりを持ったのか？それは大学4年生のときである。信州大学繊維学部では、4年生になると必修科目として校外実習があった。大見氏は、校外実習に際して大洲市の愛媛県蚕業試験場に2週間ほど実習生として派遣された。これが大見氏と愛媛県の縁となり、つながりとなった。

大洲市は愛媛県の南予地方に位置し、「伊予の小京都」と呼ばれる地域である。8世紀ころには大洲盆地にて生糸がつくられていた記録があり、その歴史は長い。明治初期に機械が導入されてから大洲の養蚕業・製糸業は発展を遂げ、その後1930年にピークを迎えた。大見氏が実習をおこなった愛媛県蚕業試験場は、1912年設立の愛媛県原蚕種製造所を前身にもち、1923年に愛媛県蚕業試験場と改称された。大洲地方の養蚕業の発展とともに蚕業試験場は技術指導や研究開発の側面から産地の発展に重要な役割を果たしてきた（「四大洲盆地の蚕糸業」『愛媛県史 地誌Ⅱ（南予）』データベース『えひめの記憶』）。

大見氏は、蚕業試験場でのインターシップを終え、荘厳に聳え立つ飛騨山脈が見える上田キャンパスで4年間の大学生活を満喫し、1957年3月に信州大学繊維学部を卒業した。（次号につづく）

